和歌山への私の提言
素晴らしい和歌山を皆に伝えよう！

胡　欣洪
（経済学研究科修士課程）（中国）

外国の人はあまり和歌山を知らない。素敵な人が一杯、素敵なところが一杯あるのに残念だ。アピールする声が小さいからだろうか。外国人だけなく、和歌山の若者も地域のすばらしい歴史や文化を案外知らないようだ。和歌山の伝統産業を発展させ、歴史ある文化をもっと外に向けてアピールできれば、和歌山を訪れる人が増え、さらに和歌山に住みたいと思う人もきっと、増えると思う。

今年の８月２日、日本語のボランティア、青木先生は、私とベトナムの留学生を湯浅に案内してくれた。私は、地場産業に関心を持っており、醤油造りについてもレポートを書きたいと思っていたので、先生は実際に見学に連れ行ってくださった。

湯浅の町は道幅が狭いが、対向車とすれ違う時、お互いに譲り合う。とても気持ちが良い。道は狭いがスムーズに通行できる。車を駐車して、町並みを歩いていると、見過ごしそうな路地が家の間から顔を覗かせる。一味違う静かで懐かしい風情を感じる。

お店の方のご好意で、天保 12 年創業の角長醤油工場を見学させてもらった。醤油ができるまでの歴史はビデオを見ながら説明されて、実際の醤油工場を見学した。工場の中には古い酵母菌がたくさんついている天井や壁。醤油の良い香りがあふれる。私たちの急な見学なのに、お店の方は、とても親切に案内してくれた。

湯浅の人は、海、山、川の恵まれた自然の中で静かに暮らしている。その日に釣った魚を食べ、井戸にはいつもおいしい水がある。その良質な水で醤油を造る店は、文化・文政時代には 97 件あったそうだ。昔は、みかんや醤油は、店の裏の川から、海に出て、外地へ輸出したそうだ。湯浅は、古い歴史と伝統を持つ町である。

湯浅の町並みを歩いた後、隣の広川町にある「稲むらの火の館」を訪問。津波から村の人を救った「濱口梧陵の話」は大変有名で、梧陵は和歌山の誇りでもある。「稲むら火の館」と「濱口悟陵記念館」では、津波の恐ろしさと、梧陵の偉大さを知ることができ、私は大変感動した。梧陵は津波が来るのを村人に知らせるため、自分の所有する大切な稲に火をつけて、逃げる人が避難する方向を示し、多くの村人の命を助けたのである。津波の後も家や仕事をなくした人が村に住み続けられるために、堤防を造る仕事を与え私財で賃金を払った。彼の功績と、その時代に既に海外に目を向けていた視野の広さに心を打たれた。

和歌山には、人々に誇れる文化や歴史、そして人やモノが沢山ある。和歌山に住んでいる私達留学生でも、きっとこの和歌山の素晴らしさの一部分しか知らないだろう。ほかにも、根来塗、黒江の漆器などの古い伝統技術､和歌祭りなどの伝統文化。柿、みかん、桃などの果物が豊富なフルーツ王国、全国的に有名な南高梅や紀州備長炭。マグロ漁、新鮮な魚が獲れる豊かな海｡美しい自然は日本一だろう｡さらに､世界遺産の｢高野山､熊野古道｣｡温泉もたくさんある。こんなに独特ですばらしい和歌山をどうしてもっとアピールしないのだろうか。

私は提言したい。この和歌山の自然、産業、歴史・文化のすばらしさ、そして何よりも、和歌山に住む人の温かさ、親切さを、私達のような留学生、外国人、日本の若い人に伝える努力が必要であるということを。そのためには、県内全ての学校、企業、地域の住民が連携し、和歌山の素晴らしさを外に向けて発信することが大切である。それとともに県内の小中高そして大学でも、授業・講義の中で和歌山のすばらしさを教え、地域を大切に思い、地域のことを考える子どもや若者を育成することも重要である｡｢和歌山のことを思う住民が和歌山のことを考え、そしてそれを伝えて行く｡｣そうすれば、きっと、和歌山は世界に誇る和歌山になるだろう｡｢素晴らしい和歌山を皆に伝えよう！｣